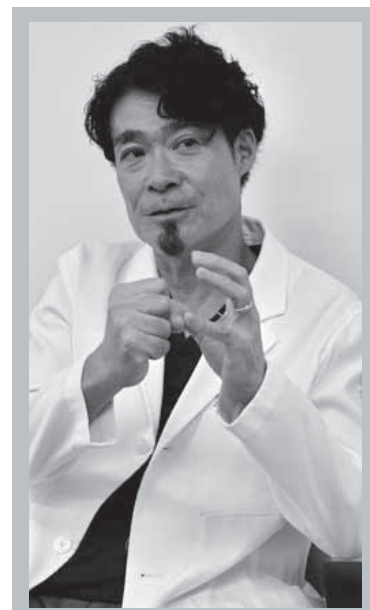


五十肩に潜む 腱板断裂

けんぼんだんれつ

肩が痛くて腕が上がらない。そんな症状が出たときは五十肩だけでなく腱板断裂の可能性があり、放っておくと痛みが増して肩の動きが固まってしまうこともある。肩の痛みが出た場合、どのような病気が疑われるのか、そしてどのような治療の選択肢があるのか。独立行政法人国立病院機構神戸医療センターの整形外科部長を務める国分毅先生に聞いた。



独立行政法人国立病院機構
神戸医療センター 整形外科部長
国分 毅 先生

― 肩関節の仕組みについて ―

肩関節は体の中で最も動かせる範囲(可動域)が広い関節で、腕を上げ下ろしするだけでなく、肩を大きく回すこともできたりします。その分、不安定な関節で緩みやすいです。球状の上腕骨頭が、受け皿のような形状をしている肩甲骨のくぼみ(関節窩)にはまる構造になっており、腱板と呼ばれる周辺の組織によって支えられ、動かせるようになっています。

問診をして状況を把握した後にレントゲンを撮り、骨の状態を見ます。さらに肩の動きや筋力などを評価した後に腱板の損傷が疑われる場合はエコーやMRIによる画像診断を追加で行います。

多くの場合は保存療法で痛みを抑えます。外用薬として湿布や塗り薬、飲み薬として消炎鎮痛剤などを使うほか、関節の動きを滑らかにするためのヒアルロン酸や痛みを抑えるのに効果的なステロイドの注射を行う場合もあります。痛みが引けばリハビリを行います。それでも痛みが治まらない場合は手術が選択肢の一つとなります。

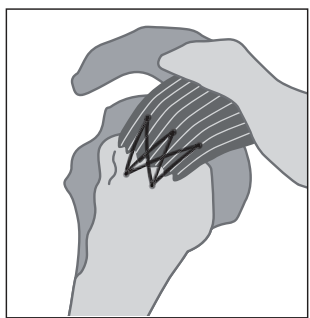
― 肩が痛いと感じたときは、どのような病気が考えられますか。 ―

俗に五十肩と呼ばれる「肩関節周囲炎」が考えられます。

加齢などにより腱板の機能が低下し緩みがでると関節周囲の組織が炎症を起こし、痛みが発生します。その中でも腱板が損傷していることがあり、これが「腱板断裂」です。原因としては加齢による変性のほか、転倒などによる外傷がきっかけとなり生じることもあります。五十肩であればいずれ痛みは消えていくこともありますが、断裂した腱板は徐々に広がり、痛みが増すことがあります。ひどくなる

― 手術にはどのような方法があるのでしょうか。 ―

肩の周りに作ったいくつかの小さな傷から内視鏡を入れ、患部を見ながら手術器具を使って断裂した腱板を骨に縫い付ける「関節鏡視下手術」があります。20年ほど前まで行っていた肩を大きく切って行う手術と比べ、内視鏡を使うことで傷が目立ちにくく、出血量も少なく抑えられることが特長です。



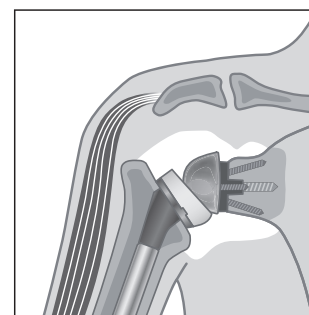
関節鏡視下手術

― どのような診断、治療を行うのでしょうか。 ―

痛みが増すようであれば早めに整形外科を受診していただく。縫合が難しいため、「リバー

型人工肩関節置換術」が選択される場合があります。通常の

― 肩の痛みで悩んでいる人に伝えたいことは。 ―
痛みを我慢してしまう人が多いのですが、治療をすれば痛みが改善し、肩や腕が動かしやすくなります。まずは専門医師に診てもらい、どのような治療があつて、どの治療が自分にとって適切なかを医師と相談しながら治療を決めていただくのがよいと思います。



リバー型人工肩関節置換術

― 手術後の経過、注意点は。 ―

手術後はリハビリを行い退院となります。退院後は週に1、2回通院をしていただき、肩の可動域を広げるリハビリを続けます。早い人であれば3カ月ほどでリハビリが終わり日常生活に戻ることができます。ただ、「関節鏡視下手術」では、通常の動きができるようになってからも、再断裂のリスクがありますのでご自分の判断で動かし過ぎないことが大事です。一方、「リバー型人工肩関節置換術」では脱臼することがあるため、後ろに手をつく動作を控えるなど生活の中で注意が必要です。

企画・制作/神戸新聞社メディアビジネス局

広告

人工関節ドットコム
電話無料相談

TEL.0570-783855

お気軽にお電話ください ※通話料は通信者負担、相談料は無料です
【平日 10:00~17:00 ※年末年始を除く】

人工関節ドットコム 検索

https://www.jinko-kansetsu.com

